俺の新たな生活がいきなり来やがった

主任大好き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

？お袋が家を出て行って早数年。俺宛に届くメールには、母がどこかの学校の教師として働いていることや、新しい家族とのことがある。

？そんな母親が出ていってしまった原因を作った張本人であるクソ親父は、働きもせずに玉を弾きに行ったりとなかなかのくそっぷりを発揮している。しかも、俺の稼いだ生活費を使ってだ。

？何がごめんねだ。何が僕は悪くないだ。

？そんな生活も高校に入学して初めての１月。まだまだ寒くなりそうな日を残したこの時期、俺の人生を１８０度変える転機が訪れた。正直言って勘弁してくれ。俺は親父

さえいなければ今のまま生活でも満足できるんだ。
？そんなこんなで始まった新たな学園生活。俺に平穏は訪れるのか。

?あ、来ないよ?

目次

プロローグ ―― 1
第1話 ―― 7
第二話 ―― 15
第三話 ―― 23
第四話 ―― 35

プロローグ

?あぁ、なんと空は青いことか。なんて、今に始まった事ではない無駄なことを考えつつも、駅近くにあるレストランのバイトへの道のりを自転車で消化していく。

?時刻は十八時を過ぎたくらいで、このまま行けばいつも通り開始二十分前に着くだろう。もうひと踏ん張りだと言い聞かせるように、深く空気を吸って勢いよく吐き出し足に力を込める。ペダルは、それに比例するようにカラカラとチェーンと歯車の擦れる音を奏でながら回る。

「そろそろ雪が降ってくるかねぇ・・・・・・」

?そろそろ駅前を通るという所で赤信号で止まらざるを得なくなる。手袋をしていても外の温度が低いのか、中の方までその冷たさが伝播して指先が冷たくなってきている。手袋をはめたまま、口元へと運び息を吐いて温めようとするが暖かくなったと思うとすぐに冷えていく。それを幾度か繰り返していると、車道の信号は黄色に変わり、赤へと変化した。

?さあ、寒さに負けずに気合を入れて行きますか。ペダルに掛けた足を動かして信号を渡ったところでふと目を引くものがあった。

「あのじいさん・・・・・・丈夫か？杖は白、か。・・・・・・・チッ」
？駅前を通っていたその老人は目が不自由らしく、杖をつきながらゆっくりと歩いていた。その周りへ目を向けるも、心配そうに見つめるだけで誰一人として助けに行こうとしない。いつも通りの光景だ。人間誰しもそんなものだろう。
？そう思いつつ、安全な場所に移動して手袋を外してポケットへ手を突っ込んで愛ｐｈｏｎｅ（スマホ）を取り出して画面を確認。まあ、開始までまだまだ時間はある。それに駅に停めても歩いて数分なのだし、そんなに困るわけでもない。そう判断を下すと駅の駐輪場へと移動してチャリを止める。
「おっと、まだ誰も行かねぇのか・・・・・・まあ、ここまで来てやったんだ。今更誰かに来られるのも癪なんだよ」
？誰に対する言い訳ということもなく、一人マフラーで口を隠しながらぼそぼそと零す。一直線にその老人に向かっているせいか、周りの人は少し心配そうにみるが俺がそちらの方へ目を向けると見て見ぬふりをする。その様子がまた一段と腹を立たせる。
？目を元に戻すと、目的の人物は目の前にいた。どう声をかけようにも、丁寧な言葉で話したことなど記憶にない。仕方ないと思いつつも、普段と変わらない言葉遣いで話しかけることにした。
「おい、じいさん。目、悪いんだろ。腕を貸すから捕まれ。それと、どこに行きたいんだ

？」

？いきなり声をかけられたことに驚いたのか、顔をこちらに向けて来た。しかし、それもすぐに終わり優しく笑うと嗄(しゃが)れた声で嬉しそうに口を開いた。

「おお、すまんのぉ・・・・・・私も歳じゃからの。光は見えてはいるが、この時期のこの時間は暗くてのぉ」

「あまりこんな時間に出歩くなよ。家族に心配かけるだろう」

「ほっほ。すまんの、それじゃあ駅の上まで頼んでもいいかい？」

「・・・・・・解った」

？近くにはエスカレーターとエレベーターがある。少し考えてエスカレーターは止めた。躓いて転んでしまうかもしれないからだ。となると、エレベーターでの移動になる。腕に掴まったことを確認して負担にならないようにゆっくりと歩調を合わせて歩く。

？駅は大きくても、移動する箇所は上か下かの2箇所だけ。エレベーターの中に入り上の矢印のボタンを押すと、すぐに動き始めた。

「そろそろ動くからな」

？そう告げると、緩やかに停止したあと扉の開くポーンという高い音を鳴らす。少しの機械音をたてて開いた扉を抑えつつ老人が出てくるのを待つ。

「すまんのぉ・・・・・・エレベーターなるものは久々に乗ったものじゃな」
「・・・・・・どこらへんまで行けばいい？ここまで来たんだし最後まで行くつもりだが？」
「ほっほ。たしか、改札の前と聞いたわい」
？そうか、と小さく返す。普通に歩けば一分と掛からないであろうその道のりを、先程と同じようにゆっくりと老人の歩調に合わせて歩く。しばらくすると、改札が見えてきた。
？そろそろだと伝えようと口を開きかけた時、前方からスーツをスタイリッシュに着こなした四十代半ばの男が小走りで近づいてくるのを見つけた。きっとこの老人の親しい人間なのだろうとあたりをつけつつも、止まることはなく改札の方へと歩いていく。
「すみません、ありがとうございます！私の義父をここまで連れてきて頂いて！」
「いやいい、気にしてない。バイト先が近いし時間があったからやったことだ」
？予想は当たっていたようで、男が目の前で止まって軽く頭を下げて礼を言ってきた。
「ほっほ、謙遜しなさんな。今の若者には少ない優しい青年じゃったよ。本当であれば、顔を、見て礼を言いたいところじゃ」
「気にするな。周りが見て見ぬふりするのにイラついて腹が立っただけだ」
「ほっほ。そういうことにしておくかの」

？知ったような口を利く老人に少しイラッと来つつも、ため息をひとつこぼすだけに留める。

　すると、その老人のことを義父と呼んだ男が申し訳なさそうに口を開いた。

「この度は本当にありがとうございます。お礼をさせていて抱きたいのですが、そのお名前を伺ってもよろしいでしょうか」

「いや、別にいらないんだが」

「ほっほ、青年よ。なら、私が勝手に決めよう。君が気に入ったのでね」

？そう言うと、義理の息子である男もいい案だと言わんばかりに手を打った。

「それで、名前を教えてくれんかね？」

？名前を教えろとは詐欺かなにかするつもりなのだろうかと思ったが、そんなことしてもこのじいさんたちには得はないだろうと考えた。それに、教えないとしつこく聞いてきそうなのだ。

「はぁ・・・・・・加治木天照（かじきそらあき）だ」

「ほうほう、いい名前だね！」

「加治木君と言ったね？それで、礼のことなんじゃが・・・・・・」

？何のためにかは分からないが、タメを作ったと思うと口を開いてこう言ったのだ。

――――うちの学校に来んかね？

？にやり、そんな言葉が似合う顔を浮かべそう告げた。今までに感じなかった面白いことを全力で楽しむようなガキのような顔。

？そして、その言葉が俺の人生を変える大きなきっかけとなったのだった。

第1話

？あの老人とその義理の息子である男に、学校にこないかと誘われて数日経った。バイトの時間も押していたため、面倒だと思って切り上げようとしたら連絡先を渡され後日詳細を話すから俺の連絡先を教えてくれと言われたのだ。正直に言うと、めんどくさいのと疲れてきたのとでどうにでもなれと思っていたため、最後には連絡先を教えてその後はサヨナラ。

？ただ、本当にに連絡が来るとはなぁ・・・・・・。あの時の俺を殴り飛ばしてやりたい気分だ。

？そうは思っても、時間は戻ってくれることもなく今に至る。場所は俺のバイト先のレストランだ。俺が学校を移るというように話が纏まったら、そのまま店長などに伝えやすいようにといった配慮らしい。そんな配慮はいらん。

「そろそろ時間か・・・・・・」

？待ち合わせをする時は基本的に人より前に来る。それを信条としている俺は面倒だと思いながらも、沈む気持ちに耐えながらここまで足を運んできた。店員の何度かバイトのシフトで顔を合わせたことのある知り合いに待ち合わせであることと、その相手の

名前を伝えておいてある。
？中里智晃（なかざとともあき）。それがあの義理の息子であると男の名前だそうだ。トモアキ、中々かっこいい名前じゃねぇか。なんて、全国のトモアキさんに媚を売りつつ何気なく外に目を向ける。
？行く来る車を眺めながら待つこと数分、待ち合わせ相手である中里が来たようだ。スタッフに案内されながら俺の対面に座る。
「いやー、ごめんね。遅くなっちゃって」
「このくらいは別にいい。少ない友人の中に、時間に頓着のない奴がいるからな。それに、時間はまだ過ぎていない」
？それは良かったと笑いながら頭を掻く中里は、苦笑いを浮かべていた。おおよそ、俺の態度か言葉遣いなのだろう。中里は、さてと口を開いて閑話休題すると本題に入ることにしたらしい。
？・・・・・・思ったのだが、この男は場によって言葉遣いを変えるようだ。前回のような丁寧な言葉ではない。
「この前、義父や私が言ったことを覚えているかな？」
「ああ。学校に来ないか、だろ？」
「そうだよ」

？忘れてなくてよかったよー、と緊張のない間延びした声で話す。が、油断する事なかれ。あの老人とこの男は、自分たちの判断で学校に来ないかと誘うことが出来る程度には地位が高いはずだ。それこそ、私立の高校で役職は理事長であったり校長であったり様々だろう。

？しかし、こちらには転校できるような金はないのだ。クソ親父がクビを切られて働かなくなり、それが原因でお袋が出て行ったというのに働きもせずにフラフラと遊びに出ていつの間にか帰ってくるの繰り返しだ。金銭管理は俺がしているというのに、寝ている間に財布から抜き取られたりと金銭的余裕なんてこれっぽっちもない。何度もそのことで怒ったが実を結ばず、最終的に殴って蹴っての喧嘩に発展までしたが効果なし。仕方なく、金庫等に入れるも今度は逆ギレ。小遣いを出せだのなんだのと喚くそれを無視した翌日には、金庫が壊されていた。それを見て諦めることにして小遣いを月５００円出すことにした俺を誰が責められるだろうか。

？そんな背景もあったため、この話は元より断るつもりだった。

「済まないが――――」

「おっと、まだこちらの出す条件を提示していなかったね」

「・・・・・・チッ」

「ちょ、ちょっと怒らないで欲しいなぁ・・・・・・なんて」

？コツンと拳を自分の頭に軽く付けるその仕草は、女の子であれば絵になるであろうそれなのだが大の男がやると軽く殺意に似た何かが沸き上がってくる。
？それを察したのか、中里は慌てて居住まいを正して咳払いをする。
「ゴホン・・・・・えっと、そうそう。こちらの提示する条件だけど、もし来ることになった場合は寮に移ってもらうことになるね。もちろん、隣の県でも端と端にあるから電車でも通えるけどきついでしょ？」
「で？」
「うん。それに関してなんだけどね？君の寮費は私たち学校側受け持とう」
「因みにその寮費は幾らなんだ？」
「そうだねぇ・・・・・・７万と言ったところかな？」
「・・・・・・たっか。なんじゃそら。そこいらのアパートで一人暮らしするよりたけぇなおい。いいところのお坊ちゃんお嬢様学校ってか？」
「まあ、そういうことだね」
？地方で一人暮らしするためにアパート借りて生活するよりも高いその金額には流石に驚きを隠せない。俺には手の届かない雲のような場所だ。きっと今住んでいる俺の家よりも綺麗なのだろう。
？しかし、学校側が持つということは学校に金を借りることになってしまうわけで。も

ちろん、それは借金であり借金である以上返していかなければならないのは目に見えている。
「ああ、言い忘れてたよ。もちろん、学費も持つよ」
「学費は月幾らなんだ？」
「そうだね。１７万かな」
？どうやら本当にとんでもない金持ち学校らしい。今年の四月から通うことになったとして計算すると、制服代から授業料、寮費やその他諸々における金額は2年間で多く見積もって７００万を超える金額だ。それを考えると無理だ。もう無理だ。やはりこの話はなかったことにするのがベストだ。
「・・・・・・済まんがその話には乗れない」
「ふむ。ある程度は予想していたが、これでもダメか」
「そちらが持つということは、こちらにとっては借金をすることになる。こちらの経済状況はクソ親父のせいで火の車だ」
「ほう・・・・・・。いや、済まない。私も勝手に君の家庭に首を突っ込んでしまった」
？それは別にいい。実際にそれは俺にとっても問題なのだし、それを相手がどう思っていようがそれは第三者の考えであり俺には何ら関係の無い話だ。
「そうか・・・・・・私はもっと違う理由かと思っていたのだが・・・・・・」

「ふぅん。・・・・・言いたいことはわかる。どうせこの外見なんだろう？残念ながらこれは生まれつきで、今までに手を付けたことなんて一切ないがな」

？俺がそう切り返すと、頷いて俺の中で唯一好きだと言える綺麗な銀の髪の毛に目を向ける。これが唯一、親父との繋がりを否定させてくれる。それと同時に、お袋の家系を最大限に肯定してくれるからだ。勿論、血の繋がりは否定することは出来ないが。まあ、それは置いといて問題は、それを台無しにするような目つきだ。一体俺は誰に似たのやら、目つきがかなりきつい。中学、高校入学当時はボーっとほかの奴らを眺めてただけなのにかなり怖がられたことを今にも覚えている。そして地味に傷ついたことも な。

？前回、中里に会う前に助けた義父に近付いた時のことだ。周りの連中があのじいさんを心配そうに見つめるも誰も助けにこない。それどころか、その現況たる俺が目をそいつらに向けたら勢いよく目を背けことがその最たる証拠だろう。

「これは、出ていったお袋との関係を唯一肯定できるモノだからな。誰がなんと言おうが、髪色を変えるつもりなど無い」

？この言葉だけでも俺がマザコンだというのは理解できるかもしれんな。まあ、ぶっちゃけていえばそうなのだろう。お袋が離れてからそろそろ十年くらいだろうか。お袋が出ていってしまったきり帰ってこなかった時は、かなり大泣きしたのを今でも覚え

ている。
「しっかし、これは困ったなぁ・・・・・・義父さんからはなんとも欲しいと言われていたんだけどね」
「悪いな」
「まあ、このままだと平行線なのは見えてしまっているし無理やり続けて嫌われたくはないからね。・・・・・・それにしても、綺麗な髪だね。目が台無しにしているけど」
「・・・・・・ん、何だ?今ディスったな?ディスっただろ。どれ、俺も一つここでお前をディスるとするか」
「ハハハハ、君は容赦というものを知らないようだね?」
「お互い様にな」
「・・・・・・・」
?両者共に立ち上がりキャットファイト始めそうな雰囲気が漂うが理性でそれを抑え込んで、片眉の上をピクンと動かすだけにとどまらせる。それでも、俺たちの額にはきっと青筋が浮かんでいるだろうが。
「はぁ・・・・・・では、今日はこれで帰りますね。それと、気が変わったら私の連絡先にお願いします。義父さんの影響か、私も気に入った人物は何が何でも手に入れたいタイプですので」

「・・・・・・チッ、ありがた迷惑って言葉、知ってるか？」
「ええ。知っていますよ？意味を知ろうとは思いませんけどねぇ」
？ニヤリと笑ったその顔は悪戯が成功した子供のように、してやったりと言いたげに口の端を釣り上げていた。その顔を見て、憎々しげに顔を歪めた後に舌打ちをした俺は悪くないだろう。

第二話

？昨日の中里ととの会談を終えた翌日。祝日後の今日は平日であり、殆どの生徒たちがだるそうにしている。まあ、確かにこの時間であれば暖房が利きまくってるからな。眠くなるのは仕方ない。

？靴箱から教室までの道のりを歩いていると、俺にとっておなじみとなったバタバタという音が後ろから響いてくる。

「ハッハー！おはよおぉぉぉ！」

「・・・・・・」

？今日のこいつの挨拶はうるさい奴の挨拶の仕方か。・・・・・・うざいな。

「おいおい、天照（そらあき）さんよ！無視するとかありえねぇだろ！ところで、今日の挨拶何点？」

「０点。凄くウザい。ホントに。うるさいウザいうっとおしいの３拍子」

？うざい挨拶とノリで俺の肩を掴み話し掛けてきたこいつの名前は肝属克敏（きもつきかつとし）。克敏は高校からの友人なのだが、目のことを全く気にせず話しかけて来た珍しい奴だ。しかも、初対面で俺の髪がすげーだの何だの褒めてるのかバカにしてるのかその時は分からなかったが、その後悪い気はしなかったから地毛だと言うとかなり驚いていた。

？・・・・・・その反応を見たら、馬鹿にしていたと分かったので1発頭を叩いてやったが。

「え、そんなに？」

「ああ。次やったら容赦なく右でもなく左でもなくゴラゴラしてやる」

？最近、克敏に貸してもらった『ギョギョの珍妙な冒険』というマンガの3部にあったネタのこと。ゴリゴリの見た目とは裏腹に、驚く時に『ギョギョッ!?』とか言ったりするそのギャップが凄かったりするのだが、ギャグマンガかと思えば後半はシリアスになるんだわ。なにあれ超胸熱展開。かっこよ過ぎんだろ・・・・・・。

「ちょっとそれは勘弁だな」

「ならもうしないでくれ。それはそうと、お前らには言っておきたいことがあるんだわ」

「ふーん？・・・・・・お前が俺に相談たぁ珍しいな。お前ん家のゴミ虫のことかい？」

「あー、どうだろ・・・・・・確かにそれもあるっちゃあるが、それは重要じゃない」

「へぇ・・・・・・もしかして、恋ってやつですかぁ～？アッヒャヒャヒャヒャヒャヒャヒャあいだだだだだだだだ!?」

？ゲス顔を浮かべながら俺を笑ってくる姿にかなりイラついたのでアイアンクローで引き摺りながら教室まで持っていくことにした。

？俺が扉を開けて教室に入ると、クラスメートの目は俺の引き摺っている克敏に目が行

く。まあ、それもそうだろう。白目を剥き、こめかみをギシギシという音を立てながら引き摺られているのが目に入れば誰だってそっちに目が行くものだ。
？だが、俺たちのこれは3日に一度は起きる頻度のため『ああ、またか』みたいな目を向けたり、克敏を指差して笑ったりと他のクラスにはない反応が見られる。
？教室内を闊歩して克敏の椅子に強制的に座らせる。そして、強制的に座らせたそいつは未だに白目を剥いたままだった。暫くそのまま反省させておこうか。
「どうしたのさ。あんた、いつもより疲れた顔してるよ」
？克敏と同じく、珍しく目を気にしないで俺に話しかけてくる女の声。その声の持ち主は俺のそばまでやってきていたらしく、顔を見るなり心配してくれているようだ。
「あぁ、梓弥か。まあな・・・・・・そうなるような事情が最近多くてなぁ」
？こいつの名前は、川内梓弥（せんだいあずみ）。初めて名前を見る人からは、苗字上だと『かわうち』読みをされてしまうのが悩みらしい。基本的に喋り方は一昔前の男勝りな女の子といった印象を受けるが、乱雑かといえばそうでもなく今のように気を配ることが出来る姐御肌な女子であり、男女ともに人気の高い人物だ。
？そこで、未だに白目を向いたままのびている克敏と幼馴染みだと言っていて互いに混ぜくった納豆のように糸を引いているレベルでの腐れ縁だと語っているが、本人たちは互いに気があるそうだ。俺に相談するよりも、いっそのことさっさと告白すれば不安も

ないだろうに。そんなことを思っている俺は悪くないはずだ。
「ま、なんでもいいさ。ただ、辛ければそこのバカや私に相談しなさい。じゃないと、あんたはそのうち爆発しちまいそうだよ」
「・・・・・・おう、そんときゃあ頼らせてもらうわ」
？俺はこいつらには頭が上がることはないだろう。なぜなら、こいつら2人の御両親には家のゴミ虫のことで個人的にかなりお世話になっているからだ。今のバイトに付けているのも、克敏や梓弥に相談してなんとか就けたバイトなのだ。迷惑をかけるのはなるだけ避けたいのだ。
「そ、ならいいわ」
？心配してくれて、声を掛けてくれる人ってのは意外と少ない。そんな中でも、俺の周りに2人もいたのは本当に幸せなことだろう。一期一会・・・・・・ふむ、バカにはできんな。
？柄にもなくそんなことを思いつつ、一時限目の準備に取り掛かるのだった。

???

？昼休み、飯を食いながらあまり人の来ない屋上で向かい合う。

「そういえば、言いたいことってなんだよ」
？珍しい、そう付け足すような顔を向ける克敏。それにどういうするかのように興味深そうな表情を向ける梓弥。早めにこの話を終わらせようと、俺は昨日のことを詳細な事を省いて説明する。
「あー、確かにそれは一人では決めにくいわね」
「でも、その話を受けるとゴミ虫と離れられるんだろ？なら受けてみるのも一つの道じゃないか？」
「とは言ってもな、ここからはアレな話になるが家の家計は火の車状態なんだよ。常日頃からな」
「「あー」」
？仕方ない、そう言うと沈黙が続いた。
「正直に言えば、あのゴミ虫が居なければ俺は十分なんだよなぁ」
「確かにな。つってもそうもいかないだろ？」
「でも、流石にこれ以上お前らに世話になるわけにも行かない。確かに長期的に見れば受けて金を返しつつ成功させるのもアリなんだろうけど、失敗したりとか考えると選びづらいんだよな」
「でも、アンタ勉強できるじゃない。って言っても、勉強だけが全てじゃないか」

？上げて落とす・・・・・ホントそれやめてくれよ。安心させて不安にさせるとか、お前ドＳかよ。俺もＳ気味だから相容れないんだぜ？ドＳは打たれ弱いってなんかのマンガで見たから、これは説得力があると思う。
？空を見上げると、本日も快晴なり。俺の心の中は曇天だというのに。ああ、妬ましいわね。おっと、誰かの口癖が。
「はぁ・・・・・・ほんと、空はこんなに青いのに」

???

？なんなく授業を終えるといつの間にか放課後だ。本日の内容は小テストと学年末が段々と近づいているため、その内容と確認。普段から勉強していれば苦しむことなくテストを迎えて学年上位といつも通りなのだろう。
？私立高校で県内屈指の進学校である俺の通う高校は、皆それなりに成績はいいがやはりそこはピンキリで突き上げたかのような上が入れば、飛び抜けた下もいるのだ。俺は、高校に進学する時から特待生を狙うために頑張った。それはもう頑張った。こんな見た目でも中学もの時は校内で一番だったのだ。だから高校でもそうなると思っていたが、その壁は予想以上に高く段々と順位を上げてはいる。しかし、流石に一桁台。簡

単には譲ってはもらえない。
？今度こそ、1位を奪い取ってやる。そんな意気込みを抱えつつ、ペダルを漕ぐため力を入れる。今日も今日とてバイトだ。準備をするために家に向かう。
「そういや、あのゴミ虫昨日帰ってこなかったけどどうしたんだ？どこかでくたばってるのかねぇ・・・・・それなら連絡が来るだろうし、てかくたばってくれた方が俺も楽なんだよなぁ」
？そう、昨日は珍しくクソ親父が帰ってこなかったのだ。基本的には、いつも日中はどこかに出ているのだが夜になると帰ってくるのだがそれがなかったのだ。まあ、いずれ帰ってくるだろうと思っていたがあまりそういうことがなかったため気になったのだ。
？学校から二十分。帰宅が完了してバイトの準備を終える。いつも通り、十五分程度の余裕がある。明日、学校への提出物の準備を進めるため筆記用具などをひっぱりだす。
「・・・・・・・あ？」
？ピクンと俺の眉が上がった。書類を仕上げていく中、印鑑を必要とするプリントがあった。面倒だなと思いながらも、印鑑を出すために椅子を立つ。引き戸を開けてガサゴソを音を立てて探すが一向に見つからない。
？どこに閉まったか記憶の引き出しを片っ端から開け閉めして思い出そうとするが、一向に見つからない。あったところに直すを常日頃から実践してきた俺としては余り無

いことだからいつか出てくるだろうと思い、付箋を引っ張り出してプリントに貼り付けて市場を事細かに書き連ね、赤いペンで印鑑を必要とするところに上の苗字である加治木（かじき）と書いてまるで囲む。

「ホントに何処にやったかなぁ・・・・・・」

？全ての準備を終えて方を回して背もたれに寄りかかる。不意に時計を目に入れる。時刻は十七時五十分。いつもより少し遅い。それを確認すると、先程準備していた鞄を肩にかけてバイト先へ向かう。

？――――この時に気づいていれば、俺の少し先の未来は変えられていたのかもしれない。

第三話

「おーい！大神、俺たちに勉強を教えてください！」

『オナシャス！』

？テスト前の朝礼前、俺が教室に入ると男子が黒板の前に勢揃いで土下座である。このクラスのテスト前の恒例行事となったこの光景は、他クラスから観光客（野次馬）が来るようになった。

？ちなみに、大神とは俺のあだ名である。俺の名前は加治木天照（かじきそらあき）で、天照の部分をとって日本神話でもとりわけ有名である天照大御神からとったそのネーミングセンスは中々に厨二心を擽られる。まあ、悪くないな。

「はぁ・・・・・・お前らにプライドないのかよ」

「ふむ、それで飯が食えるなら誰もそんなことしない。俺ら守るべきもののために土下座をするのだ」

『そうだそうだ！』

？克敏（バカ）が何やらかっこいい台詞を大声で叫ぶが、俺は知っている。こいつら男子共が守りたいのは親から貰う小遣いの事だということを。以前の話だが、男子特有の一時のノ

リに身を任せて教えてしまい、教えた教科がクラス平均が学年一位になったのだ。すると、どうだろうか。クラスの担任が俺に頼み込んできた。どうやら、ボーナスが出たらしい。それに、妻から貰える小遣いが増えたらしい。なんとも切実であり、余りの馬鹿さ加減にため息をついた俺は悪くないだろう。

「はぁ・・・・・・身から出た錆か。おら、じゃあ、さっさとやるぞ」

『あ、ありがとうございます!』

？因みに仕方が無いといった体で俺は言うが当然見返りがある。その見返りを重宝している事は言えないでいる。何故なら、その月一人一人から日毎に飯を奢ってもらえるからだ。金を使わないでいいというのは、中々俺に優しい奴らである。

？すると、女子も席に着き始め、廊下にいる野次馬連中はノートを取り出して朝礼前にちょっとした授業が始まるのだった。

???

「うーし、おめぇら今日は終わりだ、帰れ帰れ。あ、大神ありがとうな。多分また、ボーナス出るし小遣い増えるわ」

？シッシッと払うように手を振るその仕草は教師のそれではないだろう。あまりにも

適当過ぎるＳＨＲ（ショートホームルーム）を終えた担任は生々しすぎる言葉を吐いて教室を去っていった。

？てか、ちょっと待って。ていうか何？今気づいたけど、俺の渾名って先生たちの間でも飛び交ってるの？

「ふぅ・・・・・・終わったぁ」

『ありがとうございます！』

「ホント、お前ら自分で勉強しろよ・・・・・・」

「そう言えば、お前今回どうなんだよ」

「めっちゃ自信あり。多分一位だと思う」

？ドヤ顔気味に俺は返す。今回かなり力を入れて勉強したためかなり自信ある。少なくとも、物理化学数学の三教科は満点だろう。それ以外は全て９５点は超えているはずだ。流石にこれで一位取れなかったら死ぬ。いや、ホントに。

？他のみんなはどうやら遊びに行くようだ。これから春休みもある。また、稼ぎ時なのだ。取り敢えず俺はバイトを詰め込むとしよう。

「じゃあな」

？今日は早い時間からバイトの時間を入れていたため、もう帰らなければならない。俺は掛けられる声に背を向けて扉を開けて教室から出た。なんか厨二っぽいな。

？そして、道中は何もなく静かな廊下を一人シューズの音をテンポよく刻む。靴箱へた

どり着き、靴を履いて玄関に向かうまではいつも通りだった。
「あ、あの・・・・・・加治木、君ですよね？」
？いつもと違ったのは、玄関の扉に手を掛ける前に話しかけられたことだった。後ろを振り向くと、大人しめな雰囲気を纏わせる長い黒い髪を下ろした美人さん。ふむ、名札には出水桃華（いずみとうか）と書いてあり、三年の先輩を表す青色だ。因みに、二年は赤色で一年は緑だ。
？そう言えば、三年に綺麗で成績優秀の先輩がいると聞いたことがある。その人はたしか出水と言ったからきっと目の前の先輩のことなのだろう。
「ん？ああ、そうだけど・・・・・・あんたは先輩か。すまん、あまり丁寧な言葉使えないんだ。許して欲しい」
「あ、いえ、そういうわけではなく・・・・・・えっと、これ、受け取ってください！」
？勢いよく両手で俺にかわいく包装されたものを渡された。何だ？何故包装されたものを渡されるんだ。
？誕生日ではないことは分かりきっているため、なぜ渡されるかわからないが誕生日という関連ワードで今日の日にちを確認。２月１４日が出てきた。そこまで行き着くとバレンタインデーということに気づく。
「あ、ああ、ありがとうございます・・・・・・」

？くっ・・・・・・かなり吃ってしまった。しかも、あまり丁寧な言葉は喋れないと言った矢先にこれだ。慣れてないんだよ！いつも怖がられていたから、1度たりとも貰ったことなどないのだ。故にこの気恥ずかしさがもどかしい！

「そ、その・・・・・・克敏君と梓弥ちゃんに部活の時に君のことを聞いて惹かれていって」

「あ、いや、その、ほんとありがとうございます・・・・・こういうの初めてなんで」

？そう言うと、以外に思われたらしく驚かれたのだが、直ぐに嬉しそうな顔になった。

「じゃあ、私が初めてなんですね」

？・・・・・・うおおおおおおおおおおおっ!?あれ、俺初対面だよね!?なに、何で俺こんなにときめいてんだよ。くっそ、男はなんで単純なんだよ・・・・・・！

「そ、その、返事の方・・・・・・貰えないでしょうか」

「あ、ああ・・・・・・けど、俺あんたのことを知らないから、少しずつあんたのことを知っていけたらと思う。・・・・・・だから、すまないが返事は今後させてくれないか？」

「・・・・・・・」

？目の前の女子の先輩は、拳を握り震えるその手を隠すようにスカートの側面につけている。ついでに顔を下に向けている。

？おいおい、俺やっちまったんじゃねぇのか？女子泣かせたんじゃないのか？もし本当に泣いているのなら、今後俺のイメージは大変なことになる。例えば？そんなもんいくらでも思いつく。

『あいつ、女子泣かせたらしい』『まじかよ、いいやつかと思えば見た目通りのクズか』『勉強さえできればなんでもいいと思ってるのかよ』『あいつ、そういえば夜に街で出歩いてるらしいぜ』『ちくわ大明神』

？おい、最後の誰だよ。いや、そうじゃなくてだな。ホント、あれだ。何でもするから許してください。

「よ、良かったよぉ・・・・・・・」

「え・・・・・・・な、何が？」

？いや、本当に泣いてたんかい！そして泣いてるのに何がよかったんですか。俺ホントそういうのわかんないんで詳しくお願いします。

「も、もし、フラれたらって・・・・・・・緊張しちゃって。えへへ・・・・・・・」

？・・・・・・・やばいな。これはホントやばい。何がやばいって俺がやばい。泣いてる↓理由聞く↓緊張してた↓微笑む。何これ最高のコンボかよ！

？もうOK（本能）していいんじゃない？俺の頭の中で数人の俺が会議している。俺の男としての野党がそう言い放つが、俺の人間としての与党（理性）がそれはダメだ。誠実でないと、あ

のゴミ虫と同じような存在であると戒める。するとどうだろう。野党が静まり返り与党と手を組んだ。勝敗は決したため誠実に行かせてもらう。
「私、三年だから最後に想いを伝えたくて。大学は隣の県だからもし想いが通じても会いに来れないかもなんて思ってたから」
「一つ気になる。今の時期だと勉強の方が大変だと思うんだが」
「私、推薦で行くんだ。志望校のレベルが高くて・・・・・・。評定も足りてたし、入試だと去年の途中から成績が伸びなくなっちゃってちょっと自信なかったから受かって安心したんだ」
「ん?でも受かったなら来る必要はなくないか?今は私立組の受験もそろそろ終わりだろ?」
「うん。だけど、一応大学でも苦労しないように・・・・・・・かな」
?意外だ。成績優秀と聞いていたから、余裕かと思えばそういうわけでもないようだ。高校受験と大学受験というのはかなり違うらしい。これは勉強になったな。
「今回、君のいい返事を聞けなかったのは残念だけどまだチャンスはあるみたいだしね。卒業までは覚悟しててね」
?クスッと不快にならない程度にからかうような小悪魔的な微笑みは俺の年齢＝彼女いない歴の心臓の鼓動を早める。顔が熱い。・・・・・・俺ってこんなに惚れやすかっ

たかねぇ?くっそ、俺だってやり返してやんよ!
「お、お手柔らかに」
?あれ?出水先輩の目から逸らして頬を人差し指でかいて顔を赤くしたままじゃん。やり返してないだろ!
?相手からなんの反応も得られないため、横目でチラと盗み見る。出水先輩は耳まで真っ赤にさせて下を向いている。自爆するなら言わなければいいのに・・・・・・・。
「じゃあ、俺はバイトがあるので」
「あ、連絡先だけ・・・・・・その、貰えないかな?」
「うっ・・・・・・ど、どうぞ」
?おう、ラノベやアニメの主人公の気持ちがわかった。お前らのこと、バカにしてごめん。実際に涙目上目遣いとか破壊力が高すぎてやばいわ。
「私のも入れておいたから、なにか来たら返してくれると嬉しいな」
「・・・・・・・うっす」

???

?ふう、浮かれるのはいいが浮かれすぎるのは良くないな。理性でどうにか、発狂乱舞

しそうな身体を抑え込みペダルを漕ぐ力を大きくする。自惚れでなければ、出水先輩と俺のリア充タイムのせいでバイトの時間が押しているのだ。いや、別に出水先輩との時間が悪かったという訳ではなくて、ただ単に舞い上がった俺が時間を確認してなかっただけなのだ。

？ここの交差点を右に曲がれば俺の家が直線で１００ｍくらいだろう。そこまで来れば、俺の心は既にいつも通りとは言わなくとも平穏は訪れていた。冷静になってくる途中、最近のクソ親父の行動に疑問を覚えていたのを思い出した。約半月前の帰ってこなかった日から、ちょこちょこ帰ってこない日が出てきたのだ。帰ってきたと思えば、気持ち悪いくらいにソワソワしたり二、三日すればまた帰ってこなかったりと以前との行動と比べるとかなり不審な行動を取るようになっていた。

？交差点を右に曲がった俺の目に入ってきたのは、借家である俺の家の前に数人の男たちが屯っていること。そこで俺の背中や額、腋から汗がどっと噴き出る。

（まさかまさかまさかまさか！あの時、印鑑がなくなっていたのは！）

？次第に頭が真っ白になっていく。目の前が黒くなりぼやける。急いで、ブレーキを掛けてハンドルに頭を乗せて落ち着かせることに専念する。もし、本当に考えてることが現実であった場合、一体どのくらい金を借りた。一体いつまでの期間で返すと契約した。一体担保はどれにしたのか。

？考えろ。この場合の最悪の事態は一体なんだ。親が出ることが多くなったこと、印鑑がなくなってたのは借金したからだ。最悪なのは、借りた金額じゃない。期間でもない。金利でもない。担保でもない。・・・・・・なんだ、あと一つ。あと一つは・・・・・・連帯保証人。もしそうであるならば、ここにいてはダメだ。とりあえず逃げなければ。

？――――ピロリロリンピロリロリン

？数回の通知音。そこにあった名前は、加治木大地（かじきだいち）。俺の親父であるゴミ虫の名前だった。

？俺は震える手で通話ボタンを押す。ゆっくりと愛ｐｈｏｎｅを耳に当てる。聞こえてきたのは、電話で最初にいう常套句と愉快そうに笑う男の声。

「・・・・・・・ゴミ虫、お前今どこにいる」

『うん？僕は今街いるよ？あ、東京の銀座ってところだね』

「・・・・・・・一体いくら借りた？」

『どのくらいだったかな？適当に１を先頭に８桁くらいかな』

？ゾワッと背中に悪寒が走る。きっと、俺の後ろには家の前にいた男たち数人がいることだろう。

「・・・・・・返済期間は？」

『どのくらいだっけ？あははは、ごめんね。忘れちゃって』

「・・・・・・担保は？」
『分かんないよー』
？なんてことだ。返済期間が分からない、担保もわからないなんてそれが分からないと一体いくらに増えるかわかっだんじゃない。バイトだけじゃ、この先一生払いきることなどできないだろう。
「・・・・・・最後の質問だ。連帯保証人は誰の名前を書いた」
『んー、意味が分からなかったから天照の名前書いちゃった』
？――――かしゃん・・・・・・
？耐えられなかった。それ以上突き付けられた現実を受け容れたくなかった。
「坊主ー、取り敢えず確認していいか？」
「・・・・・・・なんですか？」
「・・・・・・・お前さんの名前は？」
「加治木天照」
「親に捨てられたのは同情するが、仕事なんでな。取り敢えず、今回は連帯保証人に対しての報告だけなんだわ」
「・・・・・・」
「俺たちのところは同業者の中では一番優しくてよ・・・・・・次来る時は来週だ。どの

くらい用意できる」
「・・・・・・・十万だ」
「そうかい。約束は守れよ」
?そう言って、数人の男たちはその場を去っていった。年をを誤魔化しつつやっていた中学時代の貯金と高校での数ヶ月の貯金で二十万はある。
?だが、それでは全くと言っていいほど足りない。
「・・・・・・ハハ、ハハハ、アッハハハハハハハハハハハ!」
?ここまで絶望的だと笑えてくる。どれだけ世界は厳しいのか。どれだけ残酷なのか。紛争地域に比べればそりゃまだマシだろう。ここまで生きてこれたのだから。
?だが、何故俺がこんな思いをしなくてはならない。何故だ?俺がバレンタインデーという日にいい思いをしたからか?それなら、何故俺だけなのだ。他にもいくらでもいるだろう。
?―――ピロリロリンピロリロリン
?その場に佇んでいた俺は、落としていた愛ｐｈｏｎｅを拾い画面に浮かぶ名前を見やる。前の姓に戻した俺の母親である姶良優海(あいらゆうみ)の文字。

第四話

？俺の手元の愛ｐｈｏｎｅの画面には母親の名前である文字が並んでいる。いつもなら、ワンコールで取っているのだが、正直に言えば今は出る気は無い。その後、未だに鳴るコールもすぐに止んだ。愛ｐｈｏｎｅをポケットにしまい、震える手と足を無理矢理に抑えつけて何とか立ち上がって自転車を家まで転がすが足元は覚束無い。

？そこでもう一度、ポケットにしまった愛ｐｈｏｎｅからコール音が鳴り響く。やはり、先ほどと変わらず画面には姶良優海の文字が並んでいる。いつも取っているはずのコールで取らなかったからだろうか。出る気は無かったが、出ないとまた掛かってきそうだと判断する。多分あのお袋のことだ、色々と面倒なことになるのは目に見えている。不安を掛けないように、取り敢えずいつも通りを心掛けよう。

「もしもし、お袋？また何かあったのか？」

『もしもし、珍しいわね。ソラがすぐに出ないなんて』

「あー、今回のテストで自分が把握してる間違った場所の見直ししてたら途中で落ちたんだよ。んで、今のコール音で起きたんだわ」

『そう』

「それと、今回のテストはたぶん一位だと思う。かなり自信あるからな」
？取り敢えず、ゴミ虫の借金のことは触れられない内にこちらの近況を報告し終えなければならない。それで、向こうが電話を切るように仕向ければいい。後は、お袋のところに迷惑が掛からないように縁を切るだけ。
？出るつもりがなかったんだがなと思いながらも、俺は最後になるであろうお袋との会話を迅速に終わらせようとする。最後がこんな形になってしまうのはとても残念ではあるが、お袋の今の幸せな生活を壊したくないのだ。
『良かったわね』
「それで？お袋の方はどうしたんだよ」
？誇らしげに励ます声が聞こえてくる。それに俺がさっさと俺の話から帰るために閑話休題した時に声の質が変わった。
『・・・・・・ねぇ、何かあるんでしょ？』
？俺の焦りを見透かしたかのようなタイミングで心配した声を投げかける。嘘は見逃さない。そう言いたげな雰囲気が、電話を介しているはずなのに伝わってきている。
？俺は何処でそれを悟られたのかと頭を回しながら、何もない体（てい）で貫こうとする。
「ん、何か？そう言われてもな・・・・・・ホントにこっちは何もな『嘘』・・・・・・」
『嘘ね。お母さんは分かってるわ。あなたが何かを隠そうしていること。・・・・・・ホ

ントのこと、言ってちょうだい』

「・・・・・・・」

『私は、あの人といる苦しみからあなたも置いて逃げてしまった。あの人が働かないだろうと知っている上で。私はあなたからも逃げたの。・・・・・・今更だけど、ごめんね？あなたに、母親らしいことが何一つ、出来なかったから。・・・・・・私が、あなたを救いたいの。自己満足でもいいの。だって、私がソラの母親なんだから』

？耳元から聞こえる、涙混じりのお袋の声。それは、過去の自分の行動を悔いる言葉で謝りながら今でも俺のことを息子であると想ってくれていた。ただ嬉しかった。起きた時にいなかった母親を探したあの日から、多くの年月が経ちこうやって想い合っていることがわかったのだ。

？その一字一句は心に響き渡り、先ほどの不安と絶望に押しつぶされそうであった俺に対するそれを緩和してくれた。気づけば、俺の頬には目からこぼれてい涙の筋が出来ていた。

「・・・・・・分かった。正直、お袋には言いたくなかったけど、今の話聞いて言うことにした」

『うん。・・・・・・・うん』

？お袋は未だに泣いているらしい。取り敢えず、向こうが落ち着くまではそっとしてお

いてあげよう。

???

「ごめんね。収まったわ」

『みたいだな』

?どうやら、私の息子は見ない間に立派になっていたようだ。私が落ち着くまで話さずに私を慰めるかのように気まずくない無言の時間を作り出していた。その証拠に、今私の前にある家の玄関の姿見に泣き腫らしたあとは残りつつもいつも通りの微笑みが映っている。

?それと同時に、きっとそれだけ大事な話なのだと思うとキュッと引き締まる思いがする。

『あー、言い難いんだが・・・・・その、親父が一千万の借金をしたんだ。そんで、その連帯保証人の欄に俺の名前と印が押された』

「・・・・・・え?」

『今までは何とかバイトで貯めてた金があったから生活できてたんだ。・・・・・けど、もう無理なんだ』

？私は唖然とするしかなかった。しかし、その事を理解すると同時に大きな後悔と罪悪感が襲う。何故、あの時にソラを一緒に連れていかなかったのか。そんな問が私の心の中に浮かび上がり、様々な思いが吹き荒れる。

『もう、どうしようもないんだ。・・・・・・は、はは、ははは』

？絶望に苛まれ、なんの希望も持っていないと分かるその声を聞いた時に憶測ではあるが、何故ソラが隠そうとしたのかが分かった。きっと、私に・・・・・・。いや、私の新しい家族に迷惑を掛けたくなかったのだろう。優しい私の息子のことだ。きっとそうなのだろう。

？しかし、思い返す。そもそも、私があの男から逃げる時にソラも一緒に連れていけばよかったのだ。そうすれば、今のようにソラの苦しむ姿を聞いたり見たりすることは無かったのかもしれない。

『・・・・・俺は、お袋には迷惑を掛けたくないんだ。お袋がずっと我慢して望んでいた幸せな家庭を得たって聞いた時、嬉しかったんだ。だから、これで・・・・・・最後にしよう。ケータイを解約しないと、生活費が浮かないし』

？何故、私の息子まであの男に苦しまなければならないのだろう。

？大きな理由の一つに、自分があの家から逃げたことが挙げられることも理解している。しかし、これは余りにも酷ではないだろうか。一介の高校生が背負う運命ではない

だろう。

『だから、さよ――――』

？ソラが何を言いたいのかが分かった。これで最後の意味は関係を断ち切るのだろう。

？どうして私は息子が苦しんでいるのに無視できようか。いや、できるはずがない。例えそれが、今の生活を壊すものであったとしても、今の家族に否定されようともソラだって私の子供なのだ。私はもう、逃げることなんてしないと決めたのだからソラを救うんだ。

「言わせないわ」

『・・・・・・何で？』

？ソラの声が震えている。きっと、断られることを覚悟していたのだろう。勿論、そう言うと思ったからこそ自分から言い出そうとしたのだ。

？けれど、私の返答を聞いて声が震えたのだ。きっと、何処か自分の言ったことに肯定して欲しくなったのだろう。そして、私の返答を聞いて少しだけど安心したからではないだろうか。

『何で、だよ・・・・・・。だって、迷惑に・・・・・・』

「理由なんてないわよ。だって、貴方も私の子供なんだから」

？耳に当てていた通話口の向こうからは、嬉しさや安堵といった感情のこもった泣き声

が響いてきた。

？ここからは私の勝負だ。絶対に、ソラを助けてみせる。例え、拒否されようとも。